



もちもち堂
基本CG14枚

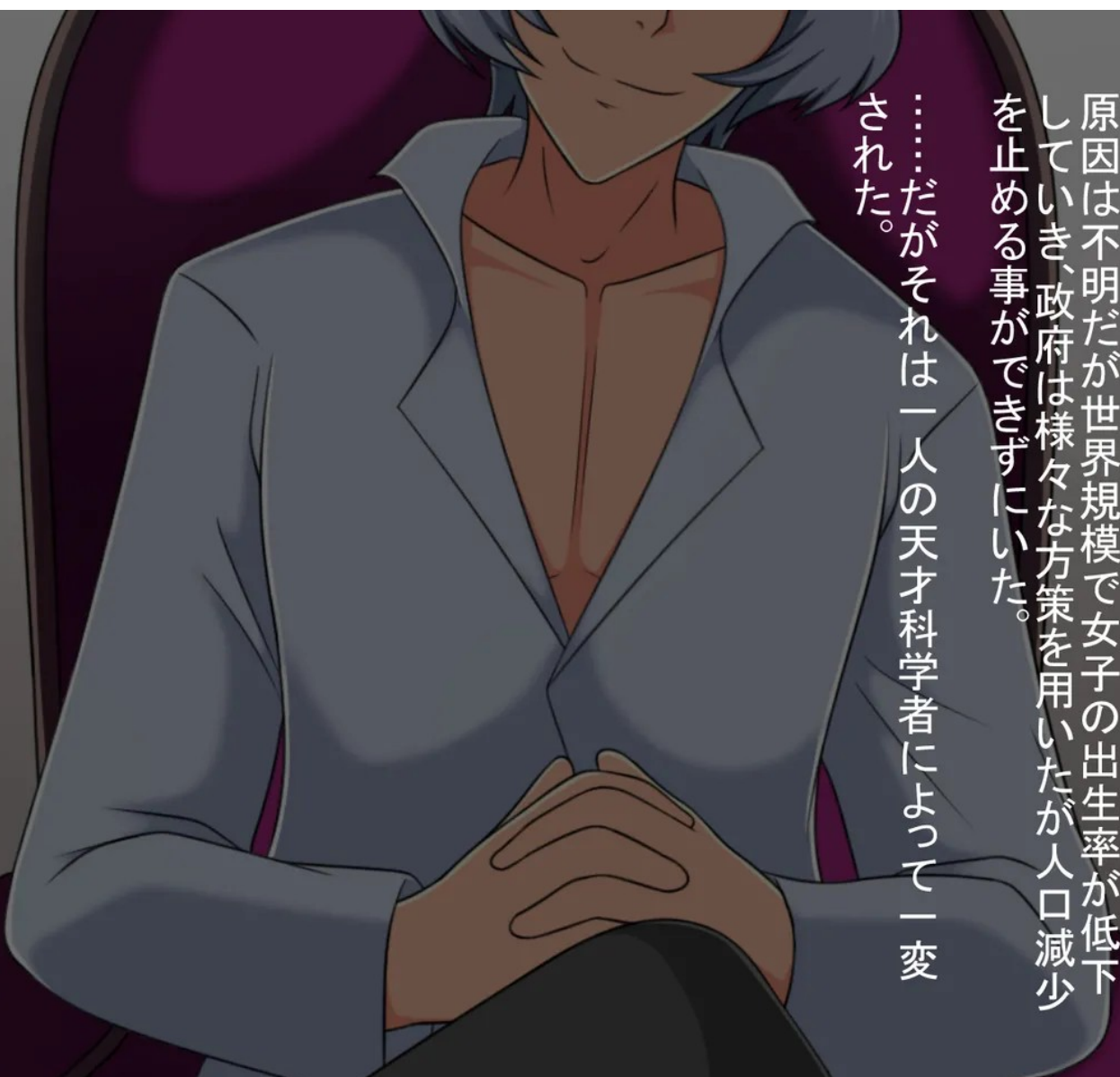
TS法案

～法律で選ばれた男はTSさせられる話～

2XXX年、人類は窮地に立たされた。

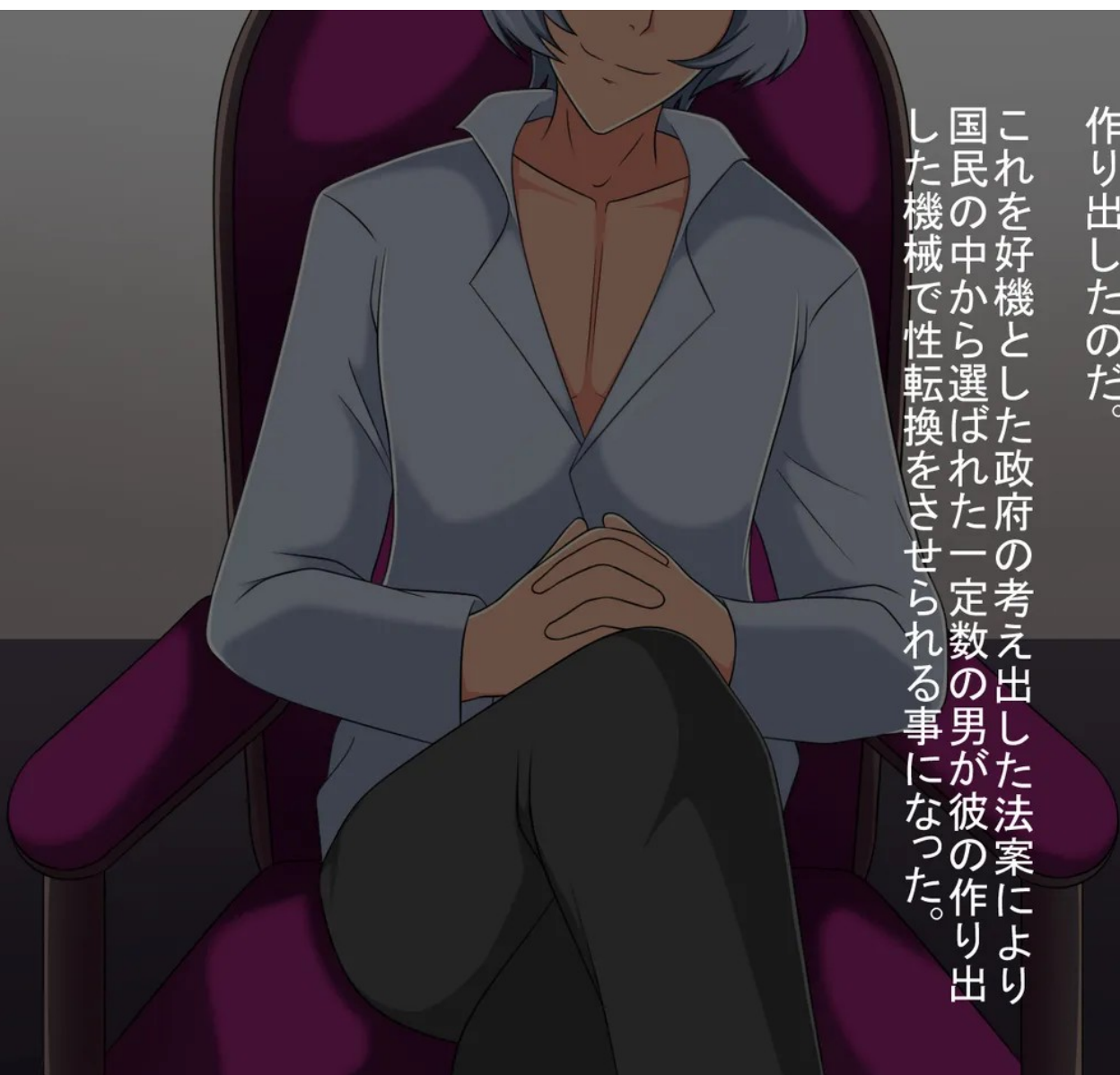
原因は不明だが世界規模で女子の出生率が低下していき、政府は様々な方策を用いたが人口減少を止める事ができずにいた。

……だがそれは一人の天才科学者によって一変された。



彼は男を女に性転換させることのできる機械を作り出したのだ。

これを好機とした政府の考え出した法案により国民の中から選ばれた一定数の男が彼の作り出した機械で性転換をさせられる事になった。

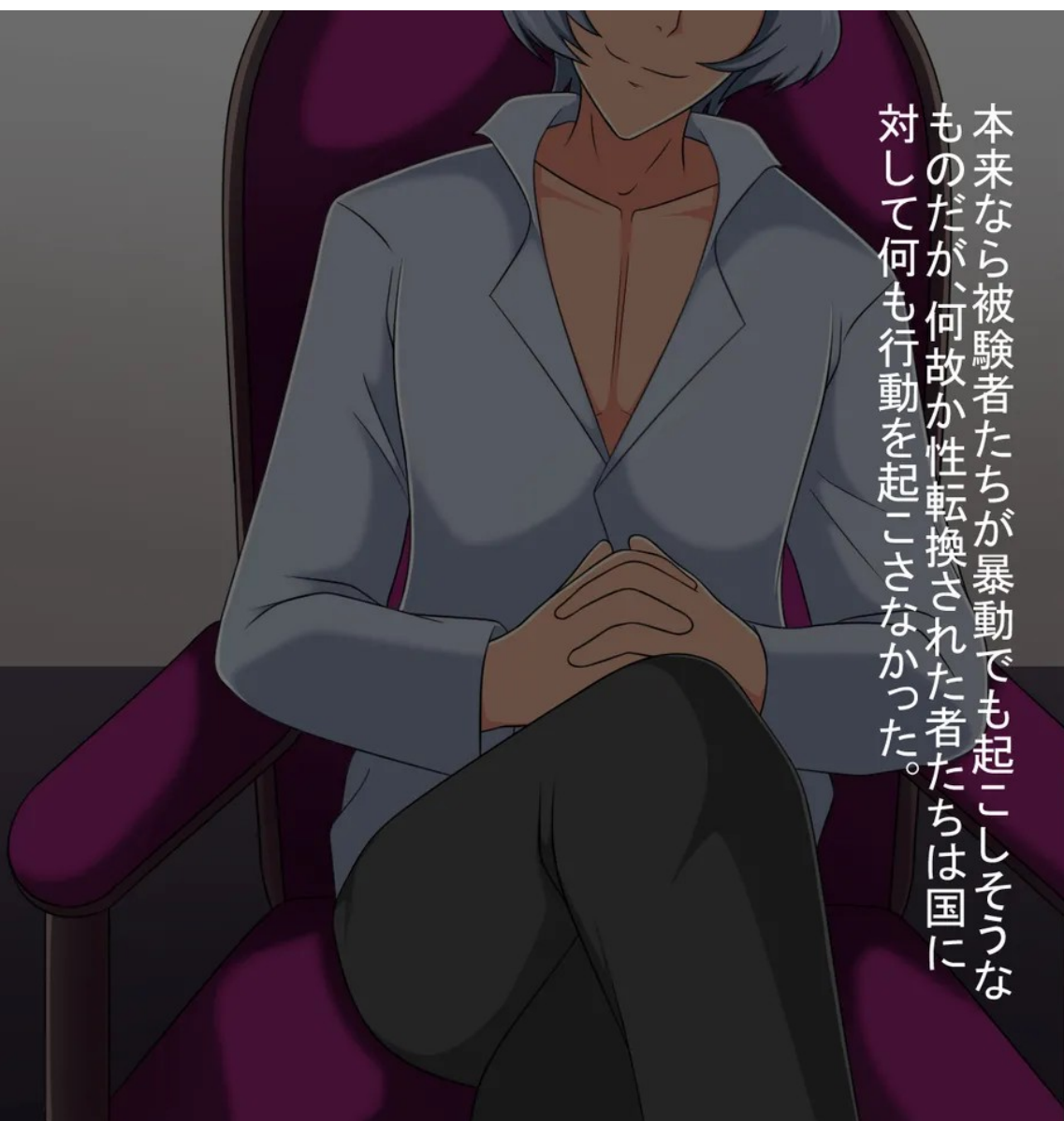


当初は人権無視だなどの声が上がると思われたが、選ばれる対象の殆どはニートや引きこもりなどの非納税者だからなのか、国民からは大した反発もなくそれは受け入れられていった。



女になつた者たちは新たな名を与えられ、
国が調べた精力旺盛な男たちの下へと送られ
その男の子供を産むことを義務付けられた。

本来なら被験者たちが暴動でも起こしそうな
ものだが、何故か性転換された者たちは国に
対して何も行動を起こさなかった。



そして、また一人。

女にさせられたニート兼引きこもりが
男の下へと送られていた。



「君が私に振り分けられた娘か」

「…あ、はい。えっと新しい名前は美嘉って
言います」

「その先日まで男だったので色々迷惑を
掛けるかもしれませんが、よろしく
お願いします」



顔が引きつってしまったかもしれないが
何とか表面上は明るく挨拶をする。

内心どう思っているかが、これから俺はこの
おっさんに世話になるしか道はないので
嫌われないように振舞わなければいけない。



（ううっ！どうして俺がこんな目に…。
ちよつと親の脛を齧ってただけなのに…。っ！）

（それにいくら可愛い女の子になったからって
自分相手じゃどうしよもできないし何の得も
ないじゃないかよ）



「まあ、いくら文句を言ったって国相手じゃ
どうしようも出来ないけど…」

「…これからこのおっさんと一緒に暮らして
セックスもしないといけないんだよな」

「はあ…鬱になりそうだ」



だが、そんな俺の考えとは裏腹におっさんは
以外にも紳士的でこちらを無理やり襲うような
真似はしてこなかった。

引きこもる事はできなくなったが、おっさんは、
働かずに毎日ゲームをしても俺を怒らないし、
女になったこちらに氣遣ってさえくれる。

子供を産むために一緒に暮らしている身と
しては流石に申し訳なさを覚えてしまう
ほどだ。



そんな理由からか、俺はいつの間にか家事やら
おっさんの身の回りの世話をするようになって
いった。

外で働いているおっさんと比べたらたいした事を
しているわけでもないのに、どんな些細な事でも
おっさんは嬉しそうにしてくれる。

そんなおっさんを見ていたらこっちまで嬉しくなり
他にも何か出来る事をしてあげたくなっていった。



（だからこうやっておっさんの相手をするのも
元々の目的を考えたら別段おかしいことでは
ないよな）



「無理はしなくてもいいんだよ」

「……ん、大丈夫」

正直抵抗が無いわけじゃない。
けどこういう事をするために国から此処に
こさせられたのだ。

（相手がこの人ならまだ受け入れられるしな）



そんな事を考えながら俺は手のひらで脈打つ
それに恐る恐る舌を這わせる。

「あむ、ちゅぷ…じゅぷっ♡んぷっ…れるっ♡」



口の中で熱くビクビクと脈打つそれに唾液を絡めながら舌で舐め上げゆっくりとストロークをする。

元々付いていた物とはいえ、初めての行為に緊張し動きは拙いものになってしまう。

だが、そんな俺の行為でも良かったのか
おっさんは気持ちいいよと褒め頭を撫で
てくれる。

俺はそれが嬉しくなり、おっさんをもっと
感じさせたくなり、さらに深く啜え込む。



「ん、じゅぶっ♡じゅぶっ♡ぢゆる…ぢゆるるっ♡」

トロトロの我慢汁で口の中はしよっぱさで満たされるが、俺は何故かそれがもっと欲しくなってしまう。徐々にストロークを早くしてしまう。

我慢汁と唾液で口の周りがベトベトになってしまうが俺は構わずしやぶり続ける。

ぢゅぶっ♡
ぢゅぶっ♡

アッ♡
アッ♡



「っ！もう出るから口を！」

「~~~~~っ♡」

離れようとするおっさんの足を押さえ付け
俺は喉の奥まで咥え込みドクドクと勢いよく
出る精液を受け止める。

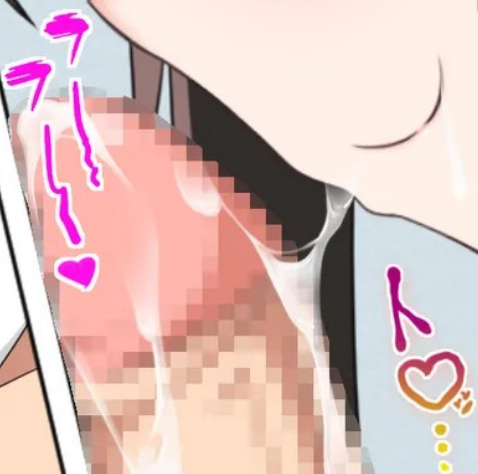




ドロドロと生臭い精液が口いっぱい広がる。

吐き気を催すほどに不味いはずなのに俺の体はそれを求めてしまう。

まるで至上のご馳走のように味わい飲み込み、尿道に残ったカスまで吸い出す。



おっさんは俺の秘所に顔を近づけると愛液で濡れた下着越しに舌を這わせ舐めあげる。

「ひうつ♡お、おっさんっ♡別にそんなことしなくても♡っ♡」

「ダメだよ。初めてなんだからちゃんと準備しないと」

んあ

んあ...

んあ

んあ

はっ♡
はっ♡





「ひあつ♥な、何これ…っ♥こんなの知らないっ♥
んっ♥あ、ああっ♥おっさんこれダメっ♥
頭おかしくなる…っ♥♥♥♥」

はっ♥
はっ♥

んっ♥♥

はっ♥

はっ♥

はっ♥

生暖かい舌に舐め上げられ、秘所からは
ピチャピチャと淫猥な音が部屋に響く。

恥ずかしいと思う一方もつとして欲しいと
思ってしまったている自分がいる。

おっさんに股間を舐められてる恥ずかしさも
気持ちよさの前に徐々に霞んでしまっている
のだ。

あッ
あッ

はッ
はッ





「んっ♡はぁ♡はぁ♡あ、あぁっ♡」

ついには拒む事もせず、なされるがまま
何の抵抗もせずに身を任せてしまう。

女の扱いに慣れているのか短い時間で何度も
絶頂させられ、秘所は愛液でビショビショに濡れ
すっかり男を受け入れる準備が出来上がっていた。

あゝ♡
あゝ♡

はっ♡
はっ♡
はっ♡
はっ♡
はっ♡
はっ♡

くちゅ

くちゅ

服を脱がされ布団の上で寝かされる。

自分から言い出したこととは言え、この後
どうなるかを考えると羞恥と緊張で胸が
ドキドキと早鐘を鳴らしてしまう。



「それにこのままずっと何もしてなかったら
他の奴に相手に移されるかもしれないし。
その…それは何か嫌なんだ」

はッ♡
おっ♡
ん♡♡

「それにこのままずっと何もしてなかったら
他の奴に相手に移されるかもしれないし。
その…それは何か嫌なんだ」

はッ♡
おっ♡
ん♡♡

「それにこのままずっと何もしてなかったら
他の奴に相手に移されるかもしれないし。
その…それは何か嫌なんだ」

はッ♡
おっ♡
ん♡♡

「それにこのままずっと何もしてなかったら
他の奴に相手に移されるかもしれないし。
その…それは何か嫌なんだ」

はッ♡
おっ♡
ん♡♡

「それにこのままずっと何もしてなかったら
他の奴に相手に移されるかもしれないし。
その…それは何か嫌なんだ」

はッ♡
おっ♡
ん♡♡

「だからさ、お願い」

「…分かった」

おっさんはそう言っているとガチガチにそそり立った
イチモツをトロトロに濡れた秘所へと押し付け
膣肉を掻き分けるように挿入する。

ん…♡

は…♡
は…♡



「ふう、あ…太いのが中に入って…っ♡」

熱い塊が中を押し広げ雄々しいそれは
ビクンと振るえる。

自分の中に異物が入られてる感覚は…
不思議と嫌ではなかった。

すげえ♡

あ…♡

は…♡



「はあ♥はあ♥んっ♥あうっ♥あ、ああっ♥」

俺が落ち着いたのを見計らいおっさんは
ゆつくりとストロークを始める。

正直痛くないわけではない。
だが破瓜の痛みすらも波のように押し寄せる
快楽に流されてしまう。

すもも
すもも

は
は
は

す
す
す





「あっ♡あっ♡や…♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡ひうっ♡
やめっ♡そんなに激しく中擦られたらっ♡」
脳を焼くような快感が自分を変えてしまう
ようで怖くなり、気づいたら俺はおっさんに
足を絡め、しがみ付いてしまう

あまの
あまの

あまの
あまの

「あ、あああ♡奥受け入れちゃダメなのにつ♡子宮が勝手に……♡」

おっさんの先端が子宮口に当たると感じる。

熱くビクビクと震える肉棒が自分の中を占領し、圧迫感と快感が混ざり合った衝撃が胸を占めてしまう。

んんん♡

すぽ♡すぽ♡

は♡は♡は♡





「っ!だぞっ!-」

「うん、きてっ♡中になっ♡あっ♡ああっ♡
あぁあぁあぁっ♡」

すっ♡すっ♡

はぁ...はぁ...
はぁ

んっ...

おっさんは俺に覆いかぶさり子宮口を押し潰すように、グリグリと擦りつけながら一番奥で射精する。

粘つくような熱く濃厚な精液が俺の中を占領するように奥いっぱいへと広がる。

ああ
♡♡♡

は
♡♡♡

せろ♡

ドゥン♡
ドゥン♡

まるで自分の所有物にマーキングするようないに俺はもう女にされてしまったのだと自覚する。

そして、それを嫌だと思っていけない自分があるのも気づかされた。



「あは♡おっさん息が荒いな。そんなに俺と
したいのかよ♡」

誘うようにお尻を突き出しわざとらしく
下着を見せ付ける。

ドキッ♡
ドキッ♡

は♡は♡



一度してタガが外れてしまったのか、あれ以降俺はあまり躊躇せずにおっさんとセックスをするようになった。

男だった時だったら他の男に抱かれるなんて絶対に嫌だったのに、何故か今はその気持ちも薄れてきている。

それが女になったからなのか、それとも相手がおっさんだからなのかは分からないが。

ドキッ
ドキッ
ドキッ

はっ
はっ
はっ



「んっ♡あぁっ♡入ってきたぁ…っ♡」

おっさんは下着をずらすと後ろから熱く脈打つ肉棒を挿入する。

ズブズブと膣肉を掻き分ける感触だけで軽くイってしまふ。最初の頃は自分がこんなにも淫乱だったなんて思いもしなかった。





「はぁ♡はぁ♡あっ...ん、んっ♡」
パンパンと肌がぶつかる淫猥な音が部屋に響き、
俺は肉棒の気持ちよさに自分から腰を突き出し
求めてしまう。

男だったときの俺に今の事を話しても信じな
かっただろう。

自分が男に抱かれ、雌の顔を晒しながら
艶声を出してしまうなんて。

だが俺は知ってしまった。
誰かに求められて抱かれるのがこんなに
気持ちいいなんてことを。

おまんこ
おまんこ

おまんこ
おまんこ

おまんこ
おまんこ



「っ！美嘉ちゃん、出すよ！」

「うん、なかにつ♡おっさんの精液いっぱい出して♡」



おっさん♡
おっさん♡

おっさん♡
おっさん♡

おっさん♡
おっさん♡



熱く濃厚な精液がビュクビュクと子宮内に広がる。
中に出されるたび体は今の状況を喜びビクビク
と痙攣してしまう。



(こんなの知ったらもう手放したくなくなっちゃうよな。…うん、だから俺がこんなふうにおっさんを求めるのはしょうがない事なんだ)

イ♡♡♡

あ♡♡

は♡♡

ア♡♡♡



「はあ…はあ…なか、す、いい締め付けてきて…っ！」

「んっ♡もつとオナホールみたいに好きに動いて
良いんだぞ♡おっさんが相手なら受け止めて
やるからさ♡」

「っ！美嘉ちゃん！」

「ひあっ♡あ、ああっ♡こんな犬みたいに後ろ
からパンパンされてるのに…っ♡
体が喜んじやってる♡」

はっ♡

はっ♡

はっ♡





おっさんはお尻を驚掴みしながら激しい動きで
膣肉を挟る。

獣のような、まるでただ雌を犯し孕ますだけの
動きに頭が沸騰してしまいそうになる。



「あはっ♡膣内であっついのもくもくって大きくなってきたあ♡」

「あ、ああっ♡すっ♡おっさんもっと♡もっとしてえ♡んん♡なか、ずぶずぶ挟って奥コンコンってされるのすき♡」

いっ♡いっ♡

はっ♡はっ♡

あっ♡あっ♡



「……」

「あ……♡ななかでビクンってしたあ♡
もう出したんだあ♡ふふ、いいぞ♡
好きな時にななかで出していいからな♡」

しゅわ♡
しゅわ♡
しゅわ♡

♡
♡
♡

はっ♡
はっ♡

あゝ♡
あゝ♡





「あう♡ドロドロの精液で子宮のなかマーキング
されてるう♡」

「俺のおまんこ、おっさんの物にされちゃってるっ♡」

はッはッ♡

はッはッ♡



「ひあっ♡そんなにおっぱいグニグニしちゃ…っ♡
あっ♡んんっ♡おっぱい弄られてるだけなのに
俺、感じちゃってるっ♡」

いつも働いてくれてるおっさんを労うため
ちよつとエッチな水着を買ってお披露目したが
興奮したおっさんに襲われるように抱きつか
れてしまった。

期待してなかったと言えは嘘になるが俺なんかで
ここまで喜んでくれるとは思はなかった。



荒い息を吐きながらおっさんはビクビクと熱く
脈打つ肉棒を背中に当ててくる。

これからめちゃくちやに犯されると思うと期待と
興奮で濡れてしまう。



「…あ♡」

おっさんは水着をずらし、お互いの性器をグチュクチュと擦り合わせる。そして俺の体の準備が出来上がっているのを確認するとそのまま一気に挿入する。

すっかりおっさんの形にされた膣内は何の抵抗もなく、それを喜んで受け入れた。

じい…

おっさん



「んっ♡んっ♡はぁ♡はぁ♡あ、あうっ♡」

火傷しそうな程に熱い肉棒が中を掻き分ける度、
膣肉はよりいっそう締め付け愛液を更に溢れ
させてしまう。



「ひぐっ♡♡」りりって下から突き上げられて……♡
あっ♡あああ♡オマシコ扱られるの気持ちいい♡」
既に男としての自分は薄れ、俺は自分が女である
事を受け入れ素直に与えられる快楽を貪る。



「んっ♡中でビクビクって…っ♡」

膣内で肉棒が更に大きくなるのが分かる。

もう限界なのだろう、俺の体はおっさんのイクタイミングを覚えており、それに合わせるようにこちらにも気分が高ぶっていく。

俺が膣内の締め付けを強くし射精を促すとおっさんの肉棒は一際大きく震え、子宮の一番奥目掛けて射精する。





「あむっ♡ちゅっ♡しゅきい♡」これ、しゅきい♡」
子宮内から伝わる熱に幸福と満足感を覚えながら、
気づいたら俺は自分からおっさんの唇を求めて
しまっていた。
だが、おっさんはそんな俺を拒むことなく思いに
応えてくれるように舌を絡ませてくれる。

は
↓
は
↓
♡





「そんなに吸ってもまだ妊娠していないんだから母乳はでないぞ♥…そんなに欲しいならちゃんと妊娠させないとな♥」

いつもは頼もしいおっさんが胸にしゃぶりつきまるで赤ん坊のように甘えてくる姿に何だか可愛らしく思えてしまう。

はッ♥
はッ♥

あッ♥

むしゃ

くちゅ

くちゅ



「あんっ♡はあ…♡ああ♡乳首、舌でコロコロ
されて…っ♡どうしようエッチな気分になって
きたあ♡」

巧みな舌使いで乳首を弄られゾクゾクとした
ものが背筋に走る。

高められた快感に口から甘い吐息が漏れて
しまう。

はっ♡
はっ♡

はっ♡

くちゅ

むいゅ

くちゅ





「たく、こんなにガチガチに勃起させて。
こっちは全然、赤ちゃんじゃないな♥」

「ほら、ガチガチちんぽシコシコしてやる
からな♥」

はッ
はッ
はッ

はッ
はッ
はッ

くちゅ

むしゃ

くちゅ

「うあ♥す♥す♥我慢汁トロトロ出てきて
手がベトベトになっちまう♥」

我慢汁を潤滑油にクチュクチュと音を立てさせ
ながら扱いていく。

胸を吸われながら肉棒を擦っているだけなのに
俺まで興奮してきたようだ。

はッ♥
はッ♥

あッ♥

ニョ
ニョ

むいッ

くちゅ

くちゅ



「んっ♡おっさん、もう出そうなのか？
いいぞ♡俺の手の中でビュッビュッっていっぱい
出しちまえ♡」

手の中で熱く脈打つ肉棒が一際大きく震える。
俺は手の動きを早くし一気に射精まで促した。

はっ♡
はっ♡

あゝ♡

ニョ
ニョ

むい
ーや

く
ちゅ

く
ちゅ





「あは♥すごっ♥おっさんの精液、手の中で
ビュルビュルって出てるっ♥」
「毎回こんなのを中に出されてたら直ぐに
妊娠しちまうよ♥」

はッはッはッ

むいっ

くちゅ

くちゅ

「おいおい。なんで直ぐに硬くなるんだよ。
…もしかして妊娠させたとこ想像して
興奮しちゃったのか？」

「あれだけ出したのにまだこんなになる
なんて絶倫すぎだろ。まったく元男相手に
こんなにしゃがって」



「元、だろ？今は私の女さ」

「ば、ばか！何恥ずかしいこと言っただ！
…たくっ、チンポこんなにしてくせに」

んっっっ



ぐにぐにと手で弄るとまだ物足りないと言わんばかりに硬さを増してくる。

むせ返るような雄の臭いと肉棒の熱さに体が思わず反応してしまう。

んっっっ♡

ふっ

くちゅ

♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡



「…っ、美嘉ちゃん！」

「…んっ♡このまま中に入りたいのか？
精液まみれのチンポ突っ込みたいなんて
本当におっさんはスケベだな♡」

んっ♡

♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡

んっ♡

んっ♡



「ん…っ♡」

精液まみれの肉棒を自分から秘所へと押し当て
ゆっくりと腰を下ろして挿入する。

ニユルニユルと精液と愛液が絡み合い、肉棒は
膣内を押し広げ中を掻き分ける。

おぼろ

はっはっはっ♡
はっはっはっ♡

はっはっ♡



「あは♡やっぱ、おっさんのチンポ気持ちいい♡」

「んっ♡あぁっ♡どうしよう、これ無しじゃ俺もう生きていけないよぉ♡」

「美嘉ちゃん…っ!」

じゅぽ♡
じゅぽ♡

はっ♡
はい…♡

おっ♡



昂ぶっていく俺の声に興奮したのか徐々におっさんの腰の動きが早くなっていく。俺もおっさんの動きに合わせてるように擦り合わせ、俺たちはまるで動物の交尾のようにただお互いを貪りあった。

すぽっ
すぽっ

はっ
はっ

おっ
おっ





膣壁は肉棒に絡みつき射精を促し、肉棒はそれに応えるようにビクリと震え何度目かも分からない射精で膣内を満たす。

熱い精液を子宮内で受けながらも、ようやく一息つけると思った俺に構わずにおっさんは更に腰を突き上げてきた。



「ま、待って♡射精中にそんなに動かされたら
頭の奥、焼けそうで…♡おかしくなる♡」

「ひぐうっ♡だめっ、これもう無理…っ♡」

すぽっ♡
すぽっ♡

はっ♡
はい…♡

はっ♡
はっ♡

はっ♡
はっ♡



足を押さえ付けられ奥へ奥へと突き上げる
動きに翻弄され、俺はなすがままにされてしまう。
子宮口を先端で押し付けられる度に背筋に電流
が走るような歓喜が襲うのだ。





(…あっ♡頭の中が白く…っ♡チカチカ点いたり
消えたりするっ♡気持ちいいの、止まらない…っ♡)

はっはっ…♡

あっ♡あっ♡

くっくっ…♡

すぽ♡すぽ♡

「…流石に出しすぎて疲れたよ」

おっさんは俺の膝の上に頭を乗せたまま
寝そべる。自分が誰かに膝枕をするなんて
思ってもいなかった。

（…けど、こんなのも悪くないって思えるあたり、
もう俺も昔とは別人だよな）



「まったく好き放題やりやがってこんなの絶対に
孕んでるぞ」

「大丈夫だよ、ちゃんと責任は取るから」

なんの躊躇もなく言い切るおっさんに嬉しさ
と恥ずかしさがごちゃ混ぜになり頬を赤くし
てしまう。



「ばーか♥言われなくても
そんなの分かってるよ♥」

「これからパパになるんだから
ちゃんと俺たちを養ってくれよな♥」





「……んっ♡おっさんのチンポが奥に当たって
赤ちゃん驚いてる♡」

「産まれる前からこんなの教え込まれたら
エッチな子になっちゃいそうだ♡」

すぽ♡
すぽ♡

は
は
は♡
は♡



（…なんで、男に戻りたいって奴がいないのか
ようやく分かった♡）

（こんなに気持ちよくて幸せで、家事を普通に
すれば今までどおり遊べるんだ）

（そりゃ、元ニート誰も戻りたがらないわな）

（今の時代、子供の世話をしてくれる機械もあるし
子供を産んでも面倒な事なんて殆どないからな）

（…何だかんだで今は幸せだし俺は女になって
よかったかな？）

は
っ
っ
っ
♡



「…全く我ながら素晴らしい物を作ってしまったな」

「君もそう思うだろ？」

「…ん？よくこんなので問題が起こらないかって？」

「おいおい、何を言い出すのかと思えば…
そんなの当たり前じゃないか」



「多くの人間は誰かに認めてもらいたい。
愛されたいと思うものさ」

「性転換した者らは気づいていないかもしれないが、
それが元に戻りたいと言いださない一番の原因だ」

「都合のいいことにニートや引き籠もりはそれを
受ける機会が少ない。だからこそ彼らは被験者に
選ばれ、僕はそれを貰える容姿と性別にして
あげたのさ」

「…後は、男性の好みに合わせて彼女らを送れば
いい」



「な？簡単なことだろ？」

「これは彼らの為になるし、他の健全な男性らの役にも立つ画期的な技術なのだよ」

「そして時間は経つにつれ心も体に順応していき
本当の女性になるというわけだ。心まで完全に
女性になってしまったら、もう男に戻りたい
なんて思わないよ」

「男だったとき女になりたいと思わなかったのと
同じようにね」

「全く、こんなものを開発してしまうなんて、本当に
僕は天才だな」























